
オレンジ色

だいぶく

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレンジ色

【著者名】

だいふく

N1152Q

【あらすじ】

よく分からぬけれど恋愛ものである」とは確かだと思う

初めて彼女を見たとき、僕はなぜだかオレンジ色をイメージした。それはけして彼女の笑顔とか体の部位だと服の色から来たものではないと思う。ただ文字どうりに、ああ、この人はオレンジ色なのだなと思ったのだ。そしてそれは無限にあるオレンジ色の中ではきっと金木犀に最も近いものだった。彼女に出会って以来、その鮮やかなオレンジ色が僕の記憶に強烈にしがみついて、僕はほとんどいつもそのオレンジ色を頭の中に描いた。

いつだつたか仲間たちと海に行つたときも彼女は一緒にだつた。

「私はね、多分この世界の中で海が一番好きなの」

彼女は浜辺で目を細て海と空のちょうど間を見ながら言つた。僕はそれには何も答えなかつたけれど、ビールを飲みながら『この世界』とは彼女の中の世界のことなのか、それとももつと大きな僕の周りにある世界のことなのかしばらく考えていた。けれど、どちらであつてもきっと僕には分からぬだらう。

近くの居酒屋に一人で飲みに行つたとき、彼女はしきりに自分のウエストを気にしていた。

「ねえ、どう思う？ 最近少し太つたかしら」

彼女は心配そうな顔で聞いた。

「いや、分からぬ。けれど、僕には君はそれで十分に魅力的だと思つよ」

僕は言った。本心だつた。彼女はなんだか少し嬉しそう目を細めた。「あら、そう？ あなたには私のことが魅力的に見えるのね。なぜかしら？」

「うん、きっと僕は君のことが好きだからじやないかな。」

僕の言葉を聞くと、彼女はくつくつと笑つた。

「なによそれ。プロポーズにしては素つ氣無いし、それにそれを知つた私はどうすればいいの？」

僕はしばらく考えた。

「じゃあプロポーズではないんじやないかな。僕は自分が思つたことを言つただけだから、君は別に何もしなくて良いんじやないかな。

」
ふうん。彼女はそう呟いて店員を呼び、ビールとカルアミルクを注文した。

しばらくすると僕と彼女は一日のうちで可能な限り多くの時間一緒に過ごすよつになつた。それはしつかりした告白も、それに対する返事も通過していなかつから、付き合つてゐるというわけではなかつたのかもしねりない。ただ、なんとなくお互ひが傍にいたほうが心地よかつたのだよつ。けれども、僕にとつても、恐らく彼女にとつてもそのことが通常であり、離れていることが異常のように思えていた。

彼女と出会つてから三度目の夏を迎えるひ、彼女は死んだ。交通事故だつた。その知らせを聞いたとき、僕は不思議なほどあつさりと現実を受け止めた。否、受け止められなかつたのかもしねりない。そうか、死んだのか。単純にそう思いながらたつた今淹れたコーヒーを飲んでこの先のことを考えていた。

ふと、彼女の「オレンジ色」が思い浮かんだ。けれども、そのオレンジ色は今にも沈んでしまいそうな悲しいオレンジ色だつた。この先そのオレンジ色はきっと限りなく暗い紫色に変わり、そして光の一切ない真つ黒になつてしまつたのだろう。そう考へると僕の目からようやく一筋の涙が流れた。

(後書き)

思いつくまま書いていつたらかなり稚拙な文章になってしまった。
小学生の作文かつての。
どうやつたらマトモで大人な文章が書けるのだろう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1152q/>

オレンジ色

2011年1月16日05時34分発行